

佐久間ダムの砂除去へ

名古屋 工法検討委が初会合

国土交通省中部地方

掘削や浚渫(しゅんた)

整備局浜松河川国道事務所は25日、佐久間ダム(浜松市天竜区)にたまった砂を取り除く工法を検討する委員会を設け、名古屋で初会合を開いた。

掘削や浚渫(しゅんた)で取り除いた砂を下流に流した際の影響を調べる実験などをを行いながら、2

017年1月までに2回の検討委の開催を予定している。同事務所によると、佐久間ダムには年間平均で約158万立方メートルの砂がたまり、容量の約3割に達しているという。

天竜川ダム再編事業の一環。佐久間ダムに確保できる水量を増やすことや、たまった砂を下流に流して遠州灘の海岸浸食を抑えることなどを目指す。

天竜川ダム再編事業の一環。佐久間ダムに確保できる水量を増やすことや、たまった砂を下流に流して遠州灘の海岸浸食を抑えることなどを目指す。

天竜川ダム再編事業の一環。佐久間ダムに確保できる水量を増やすことや、たまった砂を下流に流して遠州灘の海岸浸食を抑えることなどを目指す。



佐久間ダム

流入土砂の除却へ

中部整備局 工法検討委が初会合

中部地方整備局浜松河川国道事務所は25日、天竜川ダム再編事業に伴う恒久堆砂対策工法検討委員会(初会合)を名古屋市内で開いた。写真:佐久間ダムに流入する土砂を適切に除去し流下させるための工法を検討する。委員長には角哲也京都大学教授が就いた。

佐久間ダムは、天竜川中流部(浜松市天竜区、愛知県豊根村)に建設された発電専用ダム。再編事業では、洪水調節機能を新たに設け下流部の洪水被害を軽減する。また、機能維持を目的に恒久的な堆砂対策を実施し土砂を流下させることで土砂移動の連続性を確保。遠

州灘海岸の浸食抑制への効果も期待する。当初は、ダム底の堆積土砂を吸引し排砂トンネルで流下させる計画だったが、しかし、ダム底の形状が悪く連続吸引ができず、流木などのごみが必要。因で吸引部の目詰まりも頻発したため「吸引工法+排砂トンネル」を断念。

新たな手法は、佐久間ダム直下の河道にストックヤードを整備。平常時に掘削・浚渫した土砂をストックヤードに運搬・集積し、洪水時のゲート放流で流下させる。初会合では、これまでの検討経緯を説明。今後は浚渫・掘削土砂の運搬方法、掘削量、流出方法などを現性、コスト、環境面などから比較検討する。16年度は委員会を2回程度開き、恒久堆砂対策工法を具体化していく。

この記事・写真は日刊建設工業新聞社の許諾を得て掲載しています。

堆砂対策工法を変更

佐久間ダム直下に仮置き場

川竜天局備整再
査検編

中部地方整備局浜松河川国道事務所は25日、天竜川ダム再編事業恒久堆砂対策工法検討委員会(委員長・角哲也京大教授)を設置し、名古屋市内で初会合を開いた。佐久間ダムへの流入土砂対策として、当初予定していた「吸引工法+排砂トンネル」から「ダム直下・ストックヤード」に変更し、工法を検討することなどを確認した。浚渫土をダム直下の河道に設けた仮置き場に集積し、洪水時のゲート放流水で下流に還元する仕組みを採る。

検討委は、天竜川河口から新たに設ける天竜川ダム再編約70キロに位置する発電専用の事業に伴い、新設した洪水調節機能をもつ佐久間ダムに洪水調節機能を節容量を維持するための恒久

的な堆砂対策工法を選定する。これまで同事務所は吸引工法の適用に向け、ダム貯水池で実証実験を行った。しかし、

連続的に吸引できず、維持管理費が膨大になるため、吸引工法と排砂トンネルによる対策工法の導入を見直すことにした。代替案として、佐久間ダム直下の河道に最大約70万立方メートルの仮置き場を整備。平常時は掘削・浚渫土をストックヤードに運搬・集積し、洪水時のゲート放流水で下流に土砂を還元する工法を採用する。

土砂の運搬方法は、グラブ船などで浚渫して土運搬船に積み込み、揚砂場に運搬し、ベルトコンベヤーでストックヤードに集める方法を中心に、ダンプトラックと経済性を比較検討して決める。今後は、8月の第2回会合で土砂の運搬方法や掘削・浚渫の施工方法などを審議。2017年1月の第3回会合で運用計画を含む全体概略設計案をまとめる予定だ。

